

# 紙芝居に対する保育士の学びと活用の関係に関する研究

— どのような学びが紙芝居の活用につながるか —

浅井 拓久也・浅井 かおり

The Relation Between Nursery School Teachers' Learnings of Kamishibai and  
Its Use in Nursery Schools :  
Through the Quantitative Analysis of Questionnaires in a Kamishibai Workshop

Takuya Asai and Kaori Asai

## 要旨

本研究の目的は、紙芝居に関する知識や技術の中で保育士が紙芝居を活用する可能性を最も高めるものは何かについて検討することである。先行研究によると、紙芝居は絵本と比べて保育での使用頻度が低いなど十分に活用されていない。また、保育士対象の質問紙調査は単純集計による現状の把握に留まり、保育士の学びが紙芝居の活用にどのように関係しているかまでは検討されてこなかった。本研究では、保育士対象の紙芝居研修会での保育士の学びに着目する。自由記述から保育士の学びをカテゴリとして抽出し、紙芝居に対する学びと保育での紙芝居の活用との関係について重回帰分析を行った。分析結果として、舞台の使い方や紙芝居の演じ方ではなく紙芝居と絵本の違いについて学ぶことが、保育の中で紙芝居が活用される可能性を高めることが明らかとなった。そこで、保育士が紙芝居と絵本の違いを学ぶ機会としての園内外研修の必要性を指摘した。

## キーワード

保育での紙芝居の活用、紙芝居研修会での学び、自由記述の定量分析、重回帰分析

## 1. 研究背景と課題設定

保育の中で活用される代表的な児童文化財には、絵本、紙芝居、パネルシアター、ペープサート、人形劇がある。これらの児童文化財には、知育・徳育・美育という3つの教育的機能があるとされている。言葉や知識を学ぶ知育、人間性や社会性を学ぶ徳育、審美眼や美的な感覚を育む美育を通じて、子どもの思考力や想像力、人間性を育むのである（古橋

2016）。

こうした児童文化財の教育的機能に関して、保育所保育指針にも多くの記述がある。保育の内容の「言葉」では「絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして楽しむ」と記されている（厚生労働省 2017）。絵本や紙芝居を活用した保育を通じて、子どもが新しい言葉と出会い、語彙を増やすのみならず、言葉に興味をもつことが期待されている。また、絵本や紙芝居で展開される物語

や出来事を通じて、子どもが新たな世界を知ったり登場人物に心を通い合わせたりすることで世界観や人間性を育む保育が求められている。

このように、児童文化財を活用して保育の充実につなげるのが重要であるが、児童文化財には保育の中で活用されることが多いものとそうではないものがある。保育所保育指針には絵本と紙芝居が挙げられているが、保育の中での絵本と紙芝居の扱いは必ずしも同じではない。鬘櫛・野崎（2010a）によると、保育所や幼稚園では紙芝居が活用されているが、絵本と比べるとその使用頻度は低く、園内で所有する紙芝居の数も多くないと言われている。これは、紙芝居より絵本の方が使いやすく、絵本を使う回数が増えるほど絵本に親しみを感じ、いっそう絵本を使うようになるからではないかと指摘されている。

また、紙芝居はその使い方をはじめとする基本的な事項に関しても絵本ほど理解されていない。大元（2013）によると、紙芝居は送迎バスの待ち時間のような保育の隙間を埋めるためのつなぎの道具として扱われており、紙芝居のもつ魅力を引き出せていないことを示している。また、野崎他（2012）は保育者を対象とした調査の中で紙芝居の演じ方に着目し、紙芝居の特性や魅力を活かした演じ方になっていないことや絵本と同様の使い方になっていることが多いことを明らかにしている。このように、使用頻度や使用方法について、紙芝居は絵本と比べると十分に活用されていないのである。

では、どのようにしたら保育の中で紙芝居がより活用されるようになるだろうか。この課題に対して、先行研究では十分に回答できていなかった。紙芝居の先行研究は、歴史的な観点からその位置づけや教育的な意義の変遷を明らかにした理論的な研究と、保育者や保育者養成校学生を対象として紙芝居や舞台の使用頻度などを問う調査を中心とした実証的な研究に分けられる（浅井・森下 2018）。前者の研究は多くの成果が蓄積されてきたが、後者の研究は多くなく、また調査結果の単純集計による現状把握に終わるものが大半であった。保育所や幼稚園での紙

芝居や舞台の使用頻度や使われ方は明らかにしたものの、保育者がどのような学びや理解をすることが紙芝居の活用につながるかについては明らかにできていなかった。すなわち、保育者養成校や園内外研修での学生や保育者の紙芝居の学びと、紙芝居の活用に関する関係を検討するところまで研究が及んでいなかったのである。

たとえば、保育者や保育者養成校学生を対象とした調査を行った鬘櫛（2010a : 2010b : 2011）や野崎（2012）の研究は貴重な示唆をもたらすものではあるものの、いずれも質問紙の回答を単純集計し、紙芝居の現状を把握するにとどまっていた。各質問項目の関係、すなわちどのような紙芝居の学びが、保育における紙芝居の活用につながる可能性があるのかという検討はなされてこなかった。大元（2013）、正司（2015）、正司・渡邊（2017）の研究も質問紙調査を実施しているが現状の把握に留まるという点では同様であった。

以上の背景と先行研究をふまえて、本論文では紙芝居に対するどのような学びが活用につながる可能性があるかについて、学びと活用の関係を明らかにする。具体的には、紙芝居研修会で保育士が学ぶ紙芝居の知識や技術の中で、何が紙芝居活用の可能性を最も高めるかを検討していく。

## 2. 研究方法

### (1) 調査対象

本研究では、ある県内で実施された保育実技研修会での紙芝居研修会の参加者である保育士を調査対象とした。保育士対象の紙芝居研修会に着目する理由は、こうした研修会は時間的な制約があるため、紙芝居に関する重要な事項が中心となる。紙芝居に関するあらゆる内容を取り上げ、その学びと活用の関係について検討することは現実的ではない。そのため、研修会での学びのような重要な事項に絞られているものに着目した。また、先行研究の知見からすると参加する保育士の多くは紙芝居を十分に活用していない可能性が高い。そのため、研修会での学びをふまえて紙芝居を活用したいという意欲や気持

ちになる場合、学びとその関係を検討しやすいのである。

紙芝居研修会は、保育実技研修会の中で、2017年8月と9月に同一講師、同一内容で4回実施された。講師は保育士としての勤務経験（18年）もある保育者養成校の教員であった。また、本研修会の研修内容は毎年変わるが、2017年は紙芝居であった。講座は2時間であり、最初の1時間は紙芝居の特性を説明する講義であり、次の1時間はグループ内で紙芝居を実際に演じる練習や発表という演習であった。

紙芝居の講義では、主に3つの項目が講義された。まず、紙芝居の歴史と現在である。立ち絵や街頭紙芝居など紙芝居の成り立ちや代表的な紙芝居の紹介など現在の紙芝居について詳説された。次に、紙芝居の形式や特徴である。物語完結型と観客参加型の特徴、脚本の形式、絵本との違い（演じると読み聞かせるの違い、紙芝居を抜くとページをめくるの違い、大人数対象か個人や少人数対象か、舞台の有無）、舞台の目的や使い方が詳説された。最後に、紙芝居の演じ方である。下読みの重要性、紙芝居の抜き方、台詞の読み方（地の文との区別の仕方も含む）が詳説された。

後半の1時間は、参加者がグループになって紙芝居を演じる練習をする演習であった。6人程度で1つのグループになり、事前に用意された紙芝居をグループ内で参加者が演じ、改善点や感想を話し合った。最後に、各グループから代表者を1名選び、参加者全員の前で演じた。

研修会の対象者は保育士である。職位や経験年数、性別にかかわらず参加希望者は参加できるものであった。各回40名定員であり、4回で136名の保育士が参加した。

## (2) 調査内容

本研究では、紙芝居研修会に参加した保育士を対象とした質問紙調査を実施した。136名の保育士に質問紙を配布し、回収数（率）は125枚（92%）であった。

質問紙の内容は、性別、年代（20代から60代）、経験年数のような基本的な項目を質問したフェイスシートと本研修会の学びに関する質問項目から構成した。学びに関する質問項目は、選択式と自由記述とした。選択式の質問項目は、「紙芝居の成り立ちが理解できた」、「紙芝居の代表的な作品を理解できた」、「紙芝居の形式や特徴が理解できた」、「紙芝居と絵本の違いについて理解できた」、「舞台の目的や使い方が理解できた」、「紙芝居を演じる前の下読みの重要性が理解できた」、「紙芝居の抜き方や台詞の読み方が理解できた」、「紙芝居を明日からの保育に取り入れていきたい」の8項目であった。これらの項目は先行研究を参考にしつつ、本研修会の内容理解の確認に適するように作成した。質問項目に関する回答は、「そう思わない」、「あまりそう思わない」、「ややそう思う」、「そう思う」の4件法とした。

また、自由記述では、「本日の紙芝居研修会で最も学びになったことを自由にお書きください」として受講者の感想を自由に記述できるようにした。なお、明らかな誤字や脱字は修正し、分析に用いた。

## (3) 分析方法

本研究の目的は、紙芝居に対する保育士の学びとその活用の関係を検討することであった。具体的には、紙芝居研修会で伝えられる紙芝居の知識や技術の中の何を保育士が学ぶことが、紙芝居活用の可能性を最も高めるかを検討することであった。そのため、自由記述の「本日の紙芝居研修会で最も学びになったことを自由にお書きください」に対する回答と、選択式の質問項目である「紙芝居を明日からの保育に取り入れていきたい」の関係に着目する。

具体的には、以上で得られた回答について次の手順で分析を行った。まず、分析ソフトとしてIBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0.1を用いて自由記述からカテゴリを抽出した。次に、これらのカテゴリを独立変数、選択式の質問項目である「紙芝居を明日からの保育に取り入れていきたい」を従属変数として投入した重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。分析にはSAS9.4を用いた。

自由記述の扱いについては、先行研究では2つに分けられる。まず、記述をいくつか（あるいはすべて）選択し、そのまま提示して、それらに見解を述べたものである。大元（2013）の研究では、子ども時代の紙芝居の思い出や紙芝居と絵本の使い分けに関する自由記述の回答がそのまま列挙されている。また、正司（2015）では提示されている自由記述内のいくつかの文に下線部が付されており、これらを「キーセンテンス」としている。しかし、こうした研究では、どのような分析枠組みからこれらの記述を選択し、考察しているのか曖昧であり、分析の妥当性の判断や検証が難しいという問題があった。

次に、分析者の判断で記述をカテゴリ化したものである。先の先行研究とは異なり、研究目的に合致するように記述をカテゴリ化したものと思われる。正司・渡邊（2017）の研究では、紙芝居講習会を受講した感想の自由記述について、「文章で述べられている意味を読み取り、複数の回答のパターン文を作成した。さらにパターン文を8つのカテゴリに分け、複数回答項目として分類した」とある。しかし、本研究は先行研究の調査結果との関係性や整合性も不明確なことに加えて、どのような分析枠組みを設定して意味を読み取り、パターン文を作り、8つのカテゴリを抽出したのかという手順に関する説明はなされていないため、分析の信頼性や妥当性に大きな疑問が残っていた。

以上のように、先行研究では分析枠組みや手順を明示しない選択やカテゴリ化がなされることが多かった。そこで、本研究では次のように実施した。まず、分析対象となる125の自由記述を前掲のソフトに取り込み、カテゴリ化を行った。カテゴリ化は、すべての自由記述に対して出現頻度に基づく手法を用いて、名詞と動詞を抽出することにした（最小レコード数は20）。

出現頻度に基づく手法を選択したのは、本研究の目的が紙芝居に対する学びと活用の関係を検討するものであるため、どのような学びがあったのかを集約する必要があるからである。自由記述に対して出

現頻度に基づいて機械的に集約することで、分析の客観性を担保することが可能となる。

また、名詞と動詞を抽出対象としたのは、名詞は話題やテーマを表現しているため、受講者が何について学んだのかを明らかにすることができるからである。自由記述では最も学んだことを書くよう求めている。このため、ある保育士が紙芝居に対する学びとして演じる際の抜き方、台詞の読み方を最も学んだことと考えている場合、抜き方や台詞（ぬきかた、ぬき方、セリフなど）という名詞が記述内に出現する可能性が高い。このように、名詞を抽出対象とすることで、学びの内容を明らかにすることができる。

名詞に加えて動詞も抽出対象としたのは、紙芝居の特徴を考えると、「間をとる」、「演じる」、「抜く」のような動作を表す言葉が多く出現すると考えられるからである。先行研究によると、紙芝居を「演じる」、「抜く」という表現を知らない保育士も多くいる。このように、動詞で表現される紙芝居の学びも想定されることから動詞も抽出対象とした。

なお、動詞を抽出対象とすると、「思う」、「なる」のような研究目的とは関係の薄いカテゴリも自動的に抽出されることになるため、こうしたカテゴリは分析から除外した。本研究と同じ手法を採用している先行研究においても、出現頻度に基づく自動的なカテゴリ生成だけでは研究目的に合致した適切な分析が難しいため、目的に合致するように分析者による修正の必要性が指摘されている（山西2010、中田2011）。このような手順で分析を行うことで客観性を維持しつつ、かつ研究目的に合致する分析が可能になると思われる。

#### (4) 倫理的配慮

受講者が質問紙に回答する前に、調査目的と内容、回答は学術研究の目的でのみ使用されること、自由意志および無記名によること、回答は途中で放棄することや提出を拒むことができること、質問紙は一定期間経過後に適切な方法で破棄することなどが研修会の講師から口頭で説明された。回答の提出を

もって受講者の同意を得たとした。

### 3. 結果および考察

#### (1) 抽出されたカテゴリ

以上の手続きをふまえた自由記述の分析から、「紙芝居」(82)、「思う」(70)、「絵本」(41)、「子供」(28)、「違い」(28)、「読み聞かせる」(26)、「研修」(26)、「演じる」(25)、「保育」(25)、「歴史」(24)、「舞台」(22)、「感じる」(22)の12のカテゴリが得られた。括弧内数字は回答者数ではなく、レコード数を示している。

抽出したカテゴリを概観すると、研修会の内容が偏りなく含まれていることがわかる。「歴史」は紙芝居の歴史と現在に関する記述から抽出されている。「絵本」、「違い」、「読み聞かせる」、「舞台」は紙芝居の形式や特徴に関する記述から抽出されている。「演じる」は紙芝居の演じ方に関する記述から抽出されている。「紙芝居」、「思う」、「子供」、「研修」、「保育」、「感じる」は講義内容の横断的なカテゴリである。

これらのカテゴリは、先行研究や紙芝居関連の書籍が紙芝居の要点として重視してきたものと重複している。自由記述では本研修会で最も学んだことを記述するよう求められていることから、本研修会では紙芝居の要点について偏りなく学ばれたことがわかる。

#### (2) 重回帰分析の結果

先の分析で得たカテゴリを独立変数として使用するが、先述した分析方法の手順に基づいて「思う」、「感じる」のカテゴリは削除する。残りの10のカテゴリを独立変数、「紙芝居を明日からの保育に取り入れていきたい」を従属変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。

独立変数は2値データ化した。従属変数の記述統計量は、「そう思わない」から「そう思う」に対して1から4の点数を付与し、平均値3.93(標準偏差.022)であった。重回帰分析の結果は、表1として整理した。

表1 紙芝居の活用に影響を及ぼす学びに関する重回帰分析の結果

従属変数：紙芝居の活用 独立変数	回帰係数		t
	非標準化(B)	$\beta$	
定数	1.040		43.390
違い	.251*	.331*	2.609
R2(調整済みR <sup>2</sup> )	.431(.476)		
F(1, 121)	6.808*		

除かれた変数：紙芝居、絵本、子供、読み聞かせる、研修、演じる、保育、歴史、舞台(除去基準： $p > .10$ )

\* $p < .05$

表1によると、紙芝居の活用の可能性を高める保育士の学びには「違い」というカテゴリがプラスの影響を及ぼしていた。一方で、「違い」のカテゴリ以外は紙芝居の活用にいずれも有意な影響を及ぼしていなかった。なお、残差分析においても問題はみられなかった。以上から、保育士が紙芝居研修会で最も学んだことが「違い」である場合、保育の中で紙芝居を活用してみようという意欲や気持ちを生じさせることがわかった。

紙芝居の活用に影響を及ぼしていた「違い」のカテゴリに含まれる実際の自由記述の例は以下の通りである。

「絵本と紙芝居のそれぞれの特徴は理解して使い分けしていたが、今回の研修で違いを学ぶことができ、自分の実践に活かせると思いました。」(ID:17)

「紙芝居と絵本の違いについて今まであまり考えたことはなかったが、そんなに違うことがわかり、勉強になりました。」(ID:56)

「今日の研修で、紙芝居と絵本の違いがわかったので、紙芝居に対する考えが変わりました。」(ID:66)

上記は自由記述の例であるが、「違い」のカテゴリに分類されている記述はすべて紙芝居と絵本の違いについて述べられている。いずれも紙芝居と絵本

の違いについて知らなかった、十分に理解していなかったが、研修会を通じてその違いと理由を理解することができ、学びになったというものである。

もちろん、保育者養成校でも紙芝居と絵本の違いは説明されているであろう。養成校で使用される教科書にも紙芝居と絵本の違いは説明されている（谷田貝・廣澤 2014、古橋 2016）。しかし、学生の頃にはこうした説明が十分に理解できていないことも多い。鬢櫛・野崎（2010 b）による研究でも、学生は紙芝居と絵本は違うものであることは何となくわかっているが、その理由や詳細な違いは十分に理解できていないのではないかと指摘されている。

また、保育士として就労後も、毎日の保育を行う際に養成校で学んだことが十分に生かし切れていなかったり、多くの保育所では絵本の方が多くことから絵本を使い続ける中で紙芝居との違いについて十分に考えが及ばなくなったりすることもある。首都圏で開催された保育士を対象とした紙芝居研修会での研修会前後の学びの変化について、ウィルコクソンの符号付き順位検定を実施した研究でも、研修前より研修後の方が肯定的に変化した項目の上位に紙芝居と絵本の違いの理解があった（浅井・森下 2018）。この調査は現役保育士を対象としたものであったことに加えて、研修会で説明された紙芝居と絵本の違いを保育者養成校でも教わる基本的な内容であった。それでも、研修会の学びとして紙芝居と絵本の違いが上位に出現するということが、保育の中で紙芝居と絵本の違いが十分に理解され、使い分けがなされていないことの表れであると思われる。

以上をふまえると、保育士が保育の中で紙芝居を活用する可能性を高める学びとは、紙芝居と絵本との違いを理解することであると言える。養成校の段階で学ぶだけではなく、保育士として保育の経験を積む過程でも園内外の研修会を通じて紙芝居と絵本の違いを学ぶ（学び直す）ことが保育の中で紙芝居が活用される可能性を高めることになるのである。

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、保育の中での紙芝居活用につながる

保育士の学びについて紙芝居と絵本の違いの理解が重要な要因であることを明らかにしてきた。以上の結果から2つの示唆が得られる。

まず、紙芝居に関して学ぶべき基本的事項は多くあるが、保育の中での紙芝居活用につながるためには、保育士が紙芝居と絵本の違いを理解できるように伝えていくことが効果的ということである。もちろん、保育者養成校で使用される保育の教科書の中には、紙芝居と絵本の違いが比較、整理されているものもある。また、本研究で分析対象とした紙芝居研修会の講義内容は教科書にも記載されているような基本的な内容であった。しかし、紙芝居と絵本の違いを学ぶことで保育の中で紙芝居を活用したいという意欲や気持ちに至ったということは、これまでの紙芝居と絵本の違いの説明のあり方や方法が十分ではなかったことを示唆している。

実際、教科書では、紙芝居と絵本の比較は数ページしか掲載されていないことが多い。また、同じ物語が紙芝居と絵本で出版されているものもあるが、こうした物語を取り上げて比較したり、保育での活用に関する配慮点の違いをまとめたりした記述もない。むしろ、紙芝居の歴史、舞台の必要性や使い方、演じ方の説明に多くのページが割かれている。このように、紙芝居ならではの魅力を伝えるためにその単独性や独自性を強調した記述が多いのである。

しかし、本研究で行った分析からは、紙芝居研修会で最も学んだこととして歴史や舞台という言葉で記述したとしても、それは保育の中で紙芝居を活用することにつながる可能性は高くない（有意な結果ではなかった）ことが明らかとなった。もちろん、こうした知識や技術が重要ではないということではない。紙芝居の魅力を最大限に引き出すためには欠かせないものであろう。しかし、現在の保育の中で用いられている児童文化財に偏りがあり、紙芝居活用が十分ではない状況は保育の質を高め、子どもの遊びを充実させるという観点からも好ましくないことを考えれば、紙芝居活用の可能性を高めるような伝え方がいっそう求められる。それが、紙芝居と絵本の違いを中心にした説明をするということなので

ある。

次に、保育士を対象とした紙芝居研修会など、保育の経験を積む過程で紙芝居について学ぶ機会の重要さである。もちろん、保育士自身の紙芝居に対する興味や関心、あるいは紙芝居の魅力や意義を伝える方法に課題があれば、学ぶ機会を増やしても効果はない。しかし、そもそも紙芝居について学ぶ（学び直す）機会がなければ、日々の保育の中で紙芝居を使うという考えに至ることもなく、紙芝居活用につながらない。先に提示した分析結果は、本来は養成校などで学んでいるはずの紙芝居と絵本の基本的な違いでさえも、保育士として就労後に学ぶ（学び直す）ことで紙芝居の活用につながる可能性を高めることを示していた。そのためにも、こうした学びの場が必要になるのである。

このような観点から保育士対象の研修会を概観すると、絵本の読み聞かせの研修会と比べると紙芝居研修会は多くない。紙芝居だけを学ぶ研修会となるとなおのことである。たとえば、絵本には絵本の専門家を育成する絵本専門士養成講座がある。絵本専門士とは、「絵本専門士とは、絵本に関する高度な知識、技能及び感性を備えた絵本の専門家」とされている（国立青少年教育振興機構 2018）。また、絵本について「子供たちにとって絵本は、言語力、感性、文脈理解力、物事の理解力を驚くほど発達させ、豊かな人格形成をもたらすものとして、また、大人になっても新たな世界を発見、体感できるものとして、極めて重要です」と示されている。「子供たちにとって絵本は」の絵本という主語を紙芝居に置換しても同じことが言えるにもかかわらず、紙芝居専門士を養成する講座は見当たらない。

紙芝居について学ぶ機会の少なさから、多くの保育士は紙芝居と絵本の違いを十分に理解することができず、紙芝居ではなく使い慣れた絵本を使う頻度が高くなったり、紙芝居と絵本を同じように使ったりしている（鬢櫛・野崎 2010 a）。紙芝居について学ぶ（学び直す）機会がなければ保育の中での紙芝居活用につながらない。それゆえに、保育士として経験を積む過程で紙芝居について学ぶ機会が重要と

なる。野崎他（2012 : 93）は「保育の中に紙芝居の特性を活かした使い方を浸透させたり、紙芝居をオリジナルな教具教材として、活用できるように導いていくためには、保育養成校で、保育者になる前の学生に関心を持たせることは言うまでもないが、保育経験年数が16年以上のベテランの保育者の資質と力量を発揮してもらえるような援助が必要」と指摘している。保育の中で紙芝居を活用するためには、保育士対象の紙芝居研修会のような機会が必要となるのである。

児童文化財のもつ教育的機能が十分に発揮されることで保育の質向上につながり、ひいては子どもの遊びや生活の充実につながる。また、紙芝居には絵本とは異なる特徴や魅力がある。だからこそ、保育の中では絵本だけではなく紙芝居も活用されることが求められるのである。保育士には、絵本ばかりでもなく、紙芝居か絵本かという二者択一でもなく、紙芝居も絵本もという視点をもつ保育が求められるのである。

今後の課題として、次の2つが挙げられる。まず、説明的な実証研究の発展である。先行研究では舞台の使用頻度や紙芝居の所有数などを質問し集計するだけの記述的な研究が中心であった。これらの研究を踏まえて、どのような要因が、どのような関係で紙芝居の活用に影響を及ぼしているかのような説明的な研究が必要である。なぜなら、記述的な研究だけでは紙芝居の活用につながる具体的な要因を明確にすることはできないからである。紙芝居に関して学ぶべき要点は多くあるが、毎日の保育に尽力する保育士に対してあれもこれもまとめて学べというのは効果的ではない。紙芝居活用につながることに焦点を当てた伝え方や研修会にするためにも、データと分析に裏付けられた説明的な研究が必要となるのである。

本研究では、これまでの先行研究とは異なり統計的な分析を行うことで説明的な研究の第一歩としたが、本研究では紙芝居と絵本の違いの内容そのものには踏み込んでいなかった。そこで、両者の違いを細分化し、どの項目が紙芝居の活用に最も影響を及

ぼしているか、あるいはこれらの項目に加えて保育士の年代や経歴、保育する子どもの数などの要因を含めた分析をすることで、保育士の紙芝居の学びと活用の関係をより正確に表現するモデルを得ることができる。また、研修会後の紙芝居活用の実態の追跡調査をすることで、研修会での学びと実際の活用のつながりの関係をより正確に把握することができる。これらの分析があつてこそ、紙芝居の活用につながる学びのあり方や課題を正確に把握し、効果的な解決策の提案になると思われる。

次に、紙芝居に関する研究と児童文化財に関する研究の接続である。紙芝居の研究が児童文化財に関する研究とどのようにつながるかについて検討していく必要がある。本研究も、児童文化財の一部である紙芝居が保育の中で活用されることが児童文化財の発展につながるという前提で行ってきた。しかし、紙芝居の研究が児童文化財の研究にどのように貢献し、理論的な発展につながるかについては十分に検討できていない。

これらを今後の課題として検討していきたい。

## 引用参考文献

浅井拓久也・森下嘉昭 (2018)、「紙芝居に対する保育士の学びの実態と課題—紙芝居研修会の分析に基づいて—」、『山口芸術短期大学研究紀要』(50)、127-134.

鬢櫛久美子・野崎真琴 (2010 a)、「保育現場における紙芝居の活用状況」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(32)、65-75.

鬢櫛久美子・野崎真琴 (2010 b)、「保育者養成課程における紙芝居—学生のアンケート調査を通して—」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(32)、77-86.

鬢櫛久美子・野崎真琴 (2011)、「保育者養成課程における紙芝居その2—学生のアンケート調査を通して—」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(33)、57-66.

藤田由美子 (2012)、「保育における紙芝居活用に関する一考察」、『広島文教教育』(27)、23-35.

古橋和夫 (2016)、「児童文化財とは何か—知育・徳育・美育のはたらき—」、古橋和夫編著 (2016)、『保育者のための言語表現の技術—子どもとひろく児童文化財をもちいた保育実践—』、萌文書林、10-22.

国立青少年教育振興機構 (2018)、[<http://www.niye.go.jp/services/plan/ehon/senmon.html>] (最終検索日：2018年3月6日)

厚生労働省 (2017)、『保育指針保育指針<平成29年告示>』、フレーベル館.

中田周作 (2011)、「学童保育のあり方に関する自由記述の分析」、『中国学園紀要』(10)、199-207.

野崎真琴・小島千恵子・鬢櫛久美子・水落洋志 (2012)、「紙芝居に関する保育者の意識と活用状況」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(34)、87-96.

大元千種 (2013)、「保育現場における紙芝居の活用の課題—保育学生の紙芝居経験を手掛かりとして—」、『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』(8)、177-188.

正司顯好 (2015)、「紙芝居の現状と課題—幼児教育における可能性：埼玉県の幼稚園・保育園を中心に実施したアンケート調査に基づいて—」、『小池学園研究紀要』(13)、13-23.

正司顯好・渡邊裕 (2017)、「新人保育士と保育所長の紙芝居に対する考え方とその相違に関する分析」、『小池学園研究紀要』(15)、1-9.

八幡真由美 (2007)、「児童文化財の保育における効用に関する一考察：領域言葉の側面から紙芝居を中心に」、『上田女子短大紀要』(30)、39-47.

山西博之 (2010)、「教育・研究のための自由記述アンケートデータ分析入門：SPSS Text Analytics for Surveys を用いて」、『外国語教育メディア学会 (LTE) 関西支部メソドロジー研究部会 2010 年度報告論集』、110-124.

谷田貝公昭・廣澤満之編著 (2014)、『実践保育内容シリーズ4 言葉』、一藝社.

(あさい たくや) 秋草学園短期大学  
(あさい かおり) 東京未来大学